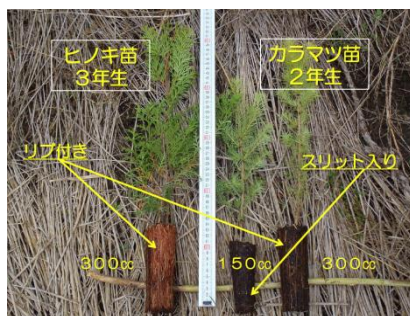


コンテナ苗植栽技術の開発・普及に向けた取組

中部森林管理局 中信森林管理署
森林整備官 堀内 志保
地域技術官 青島 雅俊

1 課題を取り上げた背景

現在の国有林は、主伐期を迎える人工林が多く、森林の若返りの時期になりつつある中で、温暖化防止対策として森林の持つ吸収作用の保全・強化を図るため、主伐再造林対策が重要な課題となっています。このため、低コスト造林技術の開発・普及に取り組む必要があり、植栽時期を選ばず、植栽が簡単、活着が良いという特徴を持ったコンテナ苗の活用・普及をしていくことが求められています。



(写真) コンテナ苗根張状況

2 取組の経過

中信森林管理署では、コンテナ苗の普及を目的として、請負事業者等を対象にしたコンテナ苗植栽体験会を実施しました。その際、従来からあるコンテナ苗専用の植栽器具を多種使用するとともに、コンテナ苗専用の唐鋤を新たに作成し、併せて試用しました。



(写真) 植栽体験会

新たに作成した専用唐鋤は、コンテナ苗のサイズに刃の大きさを合わせることで、刃の幅が細くなりぐらつきがでたため、重心を工夫し、バランスに配慮して作成しました。

また、試験地を設け、コンテナ苗と裸苗との生育調査を実施するとともに、作成した専用唐鋤を含めた多種ある植栽器具別の工期比較についても調査をしました。

に、作成した専用唐鋤を含めた多種ある植栽器具別の工期比較についても調査をしました。

3 実行結果

生育調査の結果、活着状況は、裸苗に比べコンテナ苗は、春植、夏植、秋植、どの時期においても、活着率、健全率とも良好でした。

また、植栽器具の工期比較の結果、裸苗の植付に比べコンテナ苗の植付は容易であり、コンテナ苗の植付においては、どの植栽器具を使っても作業効率は良好でした。さらに事業地での移動や長時間の作業を考えると、作成した専用唐鋤は、重量が軽く、使い慣れているため、優れているという結果になりました。



(写真) 作成した専用唐鋤の比較

4 考察

コンテナ苗は根鉢のまま植えるため、乾燥にも強く、植栽時期を選ばない伐造一貫請負事業において、事業箇所、規模等に応じて契約できると考えます。また、作成した専用唐鋤については、使用実績が少ないことから、今後、実績を増やし改良していく必要があります。

コンテナ苗を使った植付事業は始まったばかりであり、今後、実践を多く積み、実際に作業を行う請負事業者等と一緒に、これからも植栽技術の開発・普及に取り組んでいきたいと考えます。



(写真) 植栽器具工期比較調査